防除所ニュース

発行　平成１９年2月１６日

平成１９年　第 １ 号

京都府病害虫防除所

★ ホウレンソウ　べと病　情報

１、べと病の発生状況

防除所が実施した調査では、下表のようにハウス栽培、露地栽培に関係なく府内各地でホウレンソウのべと病の発生が認められています。

場　所		調査ほ場数	発生確認ほ場数
京都市	露地	11	4
	ハウス	1	0
山城	露地	3	1
	ハウス	3	1
南丹	ハウス	2	1
中丹	ハウス	2	0
府　内		22	7

（平成１９年２月１３日調べ）

２、べと病の被害

① 下葉及び子葉の表面に黄白色で輪かくのはっきりしない小さな斑点ができます。
② 斑点がしだいに拡大し、不定形の淡黄色の病斑となります。さらに被害がすすむと病斑が融合して葉の大部分が淡い黄色となり、被害葉は枯死します。
③ 株の中では外葉に発生が多く、しだいに上位葉に広がり、株全体に及びます。
④ 病斑の裏側には、特徴的なネズミ色、灰紫色の粉状のカビ（分生胞子）を生じます。

３、べと病の生態

① べと病の病原菌は藻菌類に属するカビの一種で、現在は７つの系統（レース）が確認されています。
② 平均気温が8～18℃、とくに10℃前後で、曇天や降雨が続くと多発します。また、早播きや厚播き、施肥量の多い時などは葉が繁茂し軟弱に育つので、被害が大きくなります。
③ 病原菌は主として被害株についた菌糸の形で越年し、気温の上昇とともに菌糸上に分生胞子を形成し空気伝染します。また、病葉内部には耐久器官の卵胞子が形成され、これが土中や種子に存在し、これも伝染源となります。
④ 本病は、通常春と秋に発生し、冬期は発生しませんが、今冬は暖冬傾向であるために発生したと思われます。

４、防除上の注意点

① 発病株は伝染源となるので、早期に見つけ、除去処分することが大切です。収穫後は、残さをほ場周辺には放置せず、集めて土中に埋め込むか袋に入れて処分してください。

② 多湿条件は発生を助長するので、温度、かん水、ハウスの換気などに留意し軟弱にならないように栽培管理してください。

③ トンネル栽培やベタ掛け栽培している場合は、発生に気付くのが遅れることがあるので、こまめに見て回り、初発生を見逃さないようにしてください。

④ 春まきのホウレンソウでは、できるだけ多くのレースに抵抗性を持った品種を導入することや、連作ほ場では発生が多くなるので、作目転換についても検討してください。

⑤ べと病に登録のある農薬は下表のとおりです。最新の情報を確認の上、使用に当たっては農薬のラベルを確認して、農薬使用基準や注意事項を遵守してください。

⑥ 農薬による防除は、多発してからでは効果が劣るので、発生初期に展着剤を添加し葉裏にかかるよう散布しましょう。また、散布する場合は、飛散（ドリフト）防止に十分に気をつけましょう。

農薬名（商品名）	希釈倍数等	使用時期	使用回数
ビスダイセン水和剤	500倍	本葉2葉期まで 但し、収穫45日前まで	2回以内
アリエッティ水和剤	1500倍	収穫前日まで	2回以内
コサイドボルドー	1000倍	-	
ヨネポン水和剤	500倍	収穫14日前まで	4回以内
リドミル粒剤2	9kg/10a	は種時	1回
サンドファンC水和剤	1000倍	収穫7日前まで	3回以内
ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで	3回以内

（平成１９年２月１４日現在）

（べと病に罹病したホウレンソウの葉の表と裏）